丘の上に建てられた小さな礼拝堂　ロンシャンの礼拝堂
（Chapelle Notre-Dame Du Haut）
～２０世紀の建築家　ル・コルビュジエを歩く～
フランス文化コース３年 横田伊織

１、　はじめに

今回の研究旅行の目的は「２０世紀の建築家　ル・コルビュジエを歩く」というテーマの下、パリまたはパリ郊外に建設された彼の作品を実際に見ることが目的であった。演習（フランス文化コース　後藤新治ゼミ）の中で『ユルバニスム』という文献を読んでおり、ル・コルビュジエによるパリの都市計画案について学んでいる。まず、ル・コルビュジエについて簡単に紹介する。

２０世紀の近代建築家としてフランスで活躍したル・コルビュジエは、建築をはじめ、絵画や彫刻、さらには都市計画までも手がけた人物である。１９２０年代にはパリの都市計画に着手し、パリに対して様々な提案を行った。その関心の大きさを示すかのようにコルビュジエは「ユルバニスム」（１９２５）、「輝く都市」（１９３５）、「パリの運命」（１９４１）等１９冊もの著書を出版している。私たちが演習で読んでいる「ユルバニスム」の中でコルビュジエが都市計画に抱く「ある１つのこだわり」に私は関心を持った。それは、「基準格子」という規則的に線引きされた道、つまり「直線へのこだわり」である。「ユルバニスム」において、コルビュジエは次のように述べている。『直線は人間の道であり、曲線はロバの道である。ロバは大陸のあらゆる都市に道を通した。残念ながらパリにも。』このことからも分かるように、コルビュジエは規則的な格子状の街をパリに適用しようとしたのではないかと考えられる。しかしコルビュジエは,以降様々な批判を受け、彼の直線へのこだわりは変化していった。それは、彼の手がけた３つの宗教建築のうちの１つであり、晩年の快作である「ロンシャンの礼拝堂（Chapelle Notre-Dame Du Haut)」に如実に表れているように思う。

私がロンシャンの礼拝堂を写真で最初に見た時「本当にこれはコルビュジエの作品なのだろうか」と思ったほど、直線へのこだわりが強いというイメージを持つ彼の作品の中で異色の作品なのである。ロンシャンの礼拝堂は美しい曲線を多用している。なぜコルビュジエはこれ程までに独特な造形にしたのだろうかと思い、礼拝堂の建つロンシャンの丘へ実際に訪れ、その土地の広さや丘の傾斜具合、また、礼拝堂の内部を調査しに行くという目的で旅立った。
したがって、ロンシャンの礼拝堂について、またコルビュジエが、この礼拝堂に採用した構想の源泉について以下で報告書をまとめることとする。

丘の上の礼拝堂　ロンシャンの礼拝堂

ロンシャンの礼拝堂は、アルザス地方のヴォージュ山脈の西端に位置する丘の上に１９５０年～１９５５年にかけて建設された。「高貴な場所」と呼ばれるこの敷地は、中世以来聖母マリア信仰に捧げられた巡礼地であり、１９５０年にル・コルビュジエが敷地を訪れた時には、第二次世界大戦中にナチス・ドイツの砲撃によって破壊された礼拝堂が残存していた。丘を少し下った所にもう一つの小さな礼拝堂が残っていた。

現在は廃墟となっていたが、これも聖母マリアに捧げられた礼拝堂だったという。

　このような地に１９５０年、コルビュジエは礼拝堂の建設を依頼され、周囲の景観を描き「音響的形態」の構想を思い描いたという。

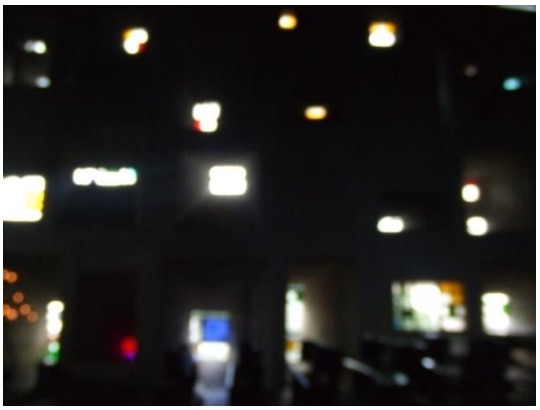
　ここで「音響的形態」について述べる。音響的形態とは、戦後、コルビュジエの造形作品に「オゾン」、「ユビュ」、「パニュルジュ」と名付けられた、一連の作品の系譜がある。これらに共通しているのがそれらの形であり、いずれも大きな耳のような形が中心となって、そこにパーツが付随する構成になっている。耳の形には、音にまつわるイメージが連想される。コルビュジエはこれを「音響的形態」と名付けた。これは、周囲と響き合うというテーマの具現化であり、その形が遠く、周りに影響を及ぼし、逆にまた周囲の空間から圧力を受けるようなものを目指す。「空間の音響学」をテーマに、小高い丘に建てられた「ロンシャンの礼拝堂」の塔の形は「音響的形態」の形に似通っている。

　次に、礼拝堂の構成について述べる。一見「自由な平面」を誇張したかのような３つの空間構成は、施主の与条件を忠実に解決している。１つは室内外での典礼、２つ目は３つの小礼拝堂の設置、３つ目は雨水の集積である。また、建設の過程では建設費を削減する努力も見られる。費用削減のために、建築物の部分の削減ではなく、全体規模の圧縮という形で解決され、さらに厚みのある壁面と屋根及び３つの小礼拝堂の高さが強調されるヴォリュームへと変化していった。また、礼拝堂の床面は敷地形状に合わせて緩やかに傾斜し、壁は旧礼拝堂の壁によって補われ、この場所の「記憶」が保存されている。こうして、ロンシャンの礼拝堂は小規模な礼拝堂となったのである。また、非科学的造形により、当時大きな反響を呼んだが、コルビュジエによれば、それは場所の風景との「正確」な関係を取り結ぶ一つの在り方だったという。このことから、なぜ小規模な礼拝堂となったのかは解決できる。

　しかし、１９２０年代には直線へのこだわりを示していたコルビュジエが５０年代にはロンシャンの礼拝堂のよう３６０°どこから見ても特徴のある造形の作品を作った点、つまりコルビュジエ自身が制作に対してどのように変化したのかについては外見を見ただけでは知ることはできない。それは、彼の初期のスケッチから見ることができる。そこには、コルビュジエがロンシャンのためにメモをとる時に思い出すこととなる本質的なもののいくつかが見られる。

まず、屋根に与えられた形態を着想させることとなるカニの甲羅や、１９１１年の「東方への旅」や１９３１年の北アフリカ滞在により得られた着想である。

ロンシャンの礼拝堂を初めて見た人は、まずその屋根の形に目を奪われるのではないだろうか。実際にロンシャンの礼拝堂の内部に入ると、やはり屋根の重量感に圧倒される。礼拝堂内では、正面の祭壇は高さもあり、広く感じられたが、後方になるにつれて屋根が低くなるため、狭ささえ感じた。この効果によって、正面の主祭壇を際立たせていたのだろう。



次に、礼拝堂内への光の取り入れ方についてだが、礼拝堂の窓は外から見ただけでは平面に見えるが、礼拝堂内は非常に奥行きのある窓となっている。これは、１９１１年の「東方への旅」から得た構想である。コルビュジエは、１９１１年から半年かけてベルリンから東欧、トルコ、ギリシャ、イタリアを巡る「東方への旅」に出る。その帰路に書き留められた、イタリアのティヴォリにあるヴィッラ・アドリアーナのセラペウムから思いついた採光システムを、数十年後にロンシャンの礼拝堂の副祭壇を照らす「潜望鏡」形の形態に採用した。また、雨水の排水に都合の良い美しい曲面を礼拝堂の屋根に与えるために、ダムの断面の採用している。

コルビュジエが旅の思い出から採用したのはそれだけではない。ロンシャンの礼拝堂の粗塗りの白い壁である。実際に壁に触れると、デコボコの表面でとても冷たかった。これは、１９３１年にコルビュジエが北アフリカ滞在中に訪れたアルジェリアの砂漠の中の「ムザブの谷」の建築物より構想が得られたものである。コルビュジエはムザブの建築に魅了され、風俗情景や街の眺望だけでなく、住居組織、中庭と内部の諸空間の配置、採光の原理の細部についても

スケッチに書き留めている。コルビュジエは、フランス国籍を取得した翌年の１９３０年にアルジェ都市計画案にかかわり、翌１９３１年にアルジェリアを旅行した。彼は１９３５年以降も時折アルジェリアへ足を運んだという。コルビュジエがアルジェリアの「ムザブの谷」にどれだけ魅了されていたかが分かる。

「ムザブの谷」とは、「イスラムの清教徒」と呼ばれるムザブ族が、迫害と流浪の末、この地に居を構えたことが始まりである。厳しい気候、限られた水資源の中で生き延びるための知恵と、厳格なイスラム教を表現した結果が「ムザブの谷」の光景である。コルビュジエは、「デザインに困ったらガルダイア（ムザブの谷）へ行け。」と言い、街の建造物を眺めては「想像力の源泉。」と呟いたという。

ロンシャンの礼拝堂は、ムザブの谷の建築物を彷彿させる程、コルビュジエはムザブの谷から多くのヒントを得ているのである。まず、先述した通りコルビュジエは、ロンシャンの礼拝堂の白壁をムザブの谷の建築物より採用した。ロンシャンの礼拝堂の白壁は、ムザブ同様の粗塗りの同じざらつきと、材料の同じ白さ、すなわち、光を捕え、形態の純粋さを引き立てる役目を果たす、同じ石灰乳が使われているのである。
また、ロンシャンの礼拝堂の壁は厚く、カニの甲羅から構想を得たという大きな屋根をしっかりと支えているイメージであった。実はこの壁の厚みもムザブから構想を得たものである。ムザブでは、壁の厚みは暑さから守り、影を引き留めるのに役立っている。一方、ロンシャンの礼拝堂においては、控え壁として屋根の量塊を支える視覚的な効果を生み出しつつ、計算された、和らいだ光の散乱を可能にしているのである。

これらの共通点は、コルビュジエが分析したムザブ建築の例と、ロンシャンの礼拝堂との間に直接的な影響があったことを強調するのではなく、むしろ建築家が旅をするにつれて、その体験が無意識に計画案の生成段階で現れるというものを示しているのである。「記憶」としての素描の役割は最も重要なものとなるということを、コルビュジエは次のように述べている。『旅をする時、もし建築や絵画、あるいは彫刻という目に見える物を実際に扱う者であるなら、自分の目で眺め、見た物を自分自身の歴史の中に内面化するために素描する。鉛筆の作業で、ひとたび内面に入った物は、終生その中に留まる。それらは書かれ、記入されたのだ。自分自身で描くこと、輪郭線をたどること、表面を占めること、ヴォリュームを見分けること等々、それはまず眺めること、おそらく観察する能力があること、発見する能力があることだ。そういう瞬間には、創意に富む現象がふいに起こりうる。その時ひとは、発明し、創造さえするのだ。』

２、　まとめ

１９２０年代にコルビュジエがパリの都市計画の際に強調した、直線のイメージとは打って変わって、晩年の作品である「ロンシャンの礼拝堂」は「今までとは異色の」という枕詞がつく程独特な造形である。それは、建設の過程での経費削減や、敷地形状に合わせての建設が根底にあったのだ。しかし、「今までとは異色のロンシャンの礼拝堂」を生み出したのは、コルビュジエが自らの旅から得た構想が大きいのではないかと思う。彼の旅の中での様々な体験の集大成がロンシャンの礼拝堂なのだ。

最後に、このような制度に参加できたことを本当に心から嬉しく思います。この旅行が無事に終わることが出来て、私自身も安心しています。そして、国際文化学部の先生方、また、援助してくださった多くの人々に心より感謝します。この場を借りて、お礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

≪参考文献≫

・ル・コルビュジエ事典
・LE CORBUSIER～建築とアート、その創造の軌跡～